

豊橋市の初代市長は薬剤師



参議院議員・薬剤師 神谷政幸

今月は私の地元豊橋市の紹介をさせていただきます。豊橋市は愛知県の南東部に位置し、東三河地方の中心地としての機能を有しています。江戸時代は城下町であり、また宿場町でもありました。

名物は、豊橋市のソウルフードともいわれる「にかけうどん」です。温かいうどんに、かまぼこ、揚げ、花かつお、ゆでた青菜が乗っている簡単なうどん、普通の醤油をかけ汁とする「赤つゆ」と、白醤油を使う「白つゆ」の2種類があります。また、豊橋のうどん屋はすべて自家製麺だとのこと。

さて、本題に入ります。明治39年（1906年）に初代の豊橋市長になったのが「大口喜六」氏でした。明治24年（1891年）東京薬学校を経て、東京帝国大学薬学科専科を卒業し、その後豊橋町議等を歴任し、初代の豊橋市長となっています。明治45年（1912年）に衆議院議員となり昭和17年（1942年）の選挙まで連続10回当選しています。大口喜六氏の名前は薬事日報社発行の「医薬分業の歴史」にたびたび登場しますが、西川隆氏の著書「くすりの社会誌：人物と時事で読む33話」では、項を立てて、「業権を求めて戦った薬剤師代議士 大口喜六の涙と汗―大正昭和期の難問解決に心を砕いた稀代の政治家」との題目で彼の戦いの内容が詳しく記載されています。

最大の戦いは、大正13年（1924年）頃から議論された「薬律」を改正し、身分法たる「薬剤師法」と普通薬の混合販売を認める業務法たる「薬品法」に分離し国会で法制化するというものだったそうです。薬剤師法は成立したが（昭和18年に再び薬事法に統合され、昭和35年に分離され現在の薬剤師法となる。）薬品法は成立しませんでした。

このように薬剤師のために戦った政治家が地元にいることを誇りに思い、同じく政治家となった私も頑張らなくてはならないと強く感じているところです。